

わたしに問わなかった者たちに、わたしは尋ねられ わたしを捜さなかった者たちに、見つけられた

第148号

イザヤ 65:1

平成20年1月25日

主、私の救いの神。私は昼は、叫び、夜は、あなたの御前にいます。私の祈りがあなたの御前に届きますように。どうか、あなたの耳を私の叫びに傾けてください。私のたましいは、悩みに満ち、私のいのちは、よみに触れていますから。私は穴に下る者とともに数えられ、力のない者のようになっています。死人の中でも見放され、墓の中に横たわる殺された者のようになっています。あなたは彼らをもはや覚えてはおられません。彼らはあなたの御手から断ち切られています。あなたは私を最も深い穴に置いておられます。そこは暗い所、深い淵です。あなたの激しい憤りが私の上にとどまり、あなたのすべての波で、あなたは私を悩ましておられます。あなたは私の親友を私から遠ざけ、私を彼らの忌みきらう者とされました。私は閉じ込められて、出て行くことができません。私の目は悩みによって衰えています。主よ。私は日ごとにあなたを呼び求めています。あなたに向かって私の両手を差し伸ばしています。あなたは死人のために奇しいわざをおこなわれるのでしょうか。亡霊が起き上がって、あなたをほめたたえるのでしょうか。あなたの恵みが墓の中で宣べられましょうか、あなたの真実が滅びの中で。あなたの奇しいわざが、やみの中で知られるのでしょうか、あなたの義が忘却の地で…しかし、主よ…朝明けに、私の祈りはあなたのところに届きます…私はあなたの恐ろしさに耐えてきて、心が乱れています…あなたは私から愛する者や友を遠ざけてしまわれました。私の知人たちは暗いところにいます。

詩篇 88 篇

万軍の主。あなたのお住まいはなんと、慕わしいことでしょう。私のたましいは、主の大庭を恋い慕って絶え入るばかりです…まことに、あなたの大庭にいる一日は、千日にまさります。私は悪の天幕に住むよりはむしろ神の宮の門口に立ちたいのです…なんと幸いなことでしょう。あなたに信頼するその人は。

詩篇 84 篇

主は聖なる山に基を置かれる。主は、ヤコブのすべての住まいにまさって、シオンのもろもろの門を愛される。神の都よ。あなたについては、すばらしいことが語られている…こうして、いと高き方ご自身が、シオンを堅くお建てになる。主が国々の民を登録される時、「この民はここで生まれた」としるされる。セラ 踊りながら歌う者は、「私の泉はことごとく、あなたにある」と言おう。

詩篇 87 篇

詩篇 42-49、84-85、87-88 の十二の詩篇は「コラの子たちの賛歌」として知られているものです。モーセの指導権に反逆したコラの息子たち、あるいは、ダビデの治世下で、レビ族の少年聖歌隊員だったコラの子孫によって歌われたものようです。バビロン捕囚に連れられていったイスラエルの全家をも含めたユダの民が、逆境の中でイスラエルの地をしのんで嘆き、罪を悔い改め、祈り求める日々の中で、何にも代えがたい神の卓越性を発見した感激、確信が表されている素晴らしい神賛歌の詩篇ですが、「コラの子たち」が神の裁きで父祖コラを一瞬のうちに失った、レビ族の中でも幕屋での聖職を任命されていたケハテ族で、神の憐れみと計り知れないご計画のゆえに一族郎党皆殺しにされないで命拾いをした部族の子孫であったことを考えると、確かに言葉の端々に、経験を通して学んだことや神への深い心情が表れているようです。

民数記 16 章には、レビ族のコラとルベン族の三人の指導者が共謀して、二百五十人のイスラエル人指導者を引き連れて、モーセとアロンに逆らい、「あなたがたは分を越えている。全イスラエルが主の御前に平等に聖なる民なのに、なぜあなた方だけがリーダーシップを取るのか」と挑戦した事件が記されています。神の御前に問題を訴え、指示を受けたモーセは神ご自身が介入してくださり、「だれがご自分のものか、だれが聖なるものかをお示しになり、その者をご自分に近づけられる」、すなわち、この問題に決着をつけてくださるので、翌日、神の選り分けのための備えをして、反逆者全員神の前に出なさいと伝えたのでした。果たして翌日、各自が主の御前で、火皿に火を入れ、香を盛るといふ、通常祭司が聖所の香壇の前でする聖なる務めに与ることが命じられたのです。ルベン族の二人の指導者は「あなたは私たちを支配しようとして君臨している」と反発し、モーセの指示に従おうとしなかったのですが、即座に神の怒りが反逆の者たちすべてに下り、「地がその口を開き、彼らと彼らに属する者たちとを、ことごとくのみこみ、彼らが生きながらよみに下る」といふ、前代未聞の恐ろしい裁きの出来事が起こったのでした。それはまさに前日、「分を越えている」とモーセとアロンのリーダーシップを非難した者たちに「分を越えているのはあなた方

なのだ」とモーセが答え、あとは神に任せ、裁きを委ねた結果の出来事でした。「香をささげる」という祭司の役割をモーセの掟に反してしていた二百五十人の指導者たちの上にも、裁きの火が下り、神ご自身が召名された指導者に逆らった者たちはすべて、「主を侮った」罪のゆえに、家族、所属品もろとも焼死、あるいは、地に飲み込まれて「集会の中から滅び去った」のでした。焼き尽くされた者たちが香をささげた青銅の火皿はすべて、主の御許から下った裁きの火で聖絶された後、打ち延ばされ、祭壇のための被金として用いられることになり、今後このような反逆が二度と起こらないように、イスラエル人のための「しるし」「記念」とされたのでした。なるほど、今後祭壇で罪の贖いのいけにえをささげるたびに、イスラエルの民はこの恐ろしい出来事を思い起こし、神を畏れ敬う気持ちを新たに続けることでしょう。

このような厳しい裁きがなされたのは、「アロンの子孫でないほかの者が、主の前に近づいて煙を立ち上らせることがないため」、すなわち、世代が代わることによって民の間に神に対する畏敬の念が失われ、神が定められた掟が安易に考えられるようになり、次第に秩序が失われ、掟が犯されることによって神の怒りを買ひ、命が失われるようなことにならないためでした。モーセが強調したように、反逆者たちが通常の死ではなく、このような異常な死を遂げたのは、「神が裁かれた」ことを民が知るためでした。しかし、早くもその翌日、痛い教訓から学ぶどころか、「あなたがたは主の民を殺した」と、民の間にはまた、モーセとアロンに対する不信、つぶやきが始まっていたのでした。学ばない民に怒りを表された主は、「全会衆を絶ち滅ぼすから、離れよ」と二人に命じられたのですが、機転を利かしたモーセがアロンに指示し、神の怒りをなだめるための執り成しの行為をさせたのでした。アロンは即座に聖所での職務のため備えてある火皿を取ると、祭壇からの火を取って香をたき、すでに神罰で死の疫病が始まっていた民の間に持っていき、罪の贖いをしたのでした。アロンの行為により神の怒りによる疫病は止み、こうして、凶らずも大祭司アロンが「死んだ者たちと生きている者たちとの間に立ったとき、神罰はやんだ」のでした。アロンこそ、神が選ばれた「大祭司」—神と人との間に立って罪を執り成す役割を担った者—であったことは、この出来事でだれの目にも明らかになったのでした。奇しくも、このアロンの贖いにはこの出来事の千四百余年後に、この地上に御降誕された大祭司イエス・キリストによる「人類の贖い」が予兆されていたのですが、神は、そのキリストと、贖われ、死を克服した者たちとが「主の大庭」にともに住むことになる、来るべき至福のメシヤの時代「神の国」のビジョンを、死を免れた「コラの子たち」、コラの子孫に与えられたのでした。

冒頭に引用した詩篇 88 篇には、だれか恐ろしい死に瀕した者が救いを求めて、両手を差し伸べ日夜忍耐強く祈っている姿が描かれています。想像を絶する逆境の中で、死に直面した希望のない日々を送っているこの人が強く訴えているのは、神の激しい憤りと、親しい者たちから忌み嫌われ、引き離されて孤独に追いやられている耐えられない辛さです。神の怒りによって滅びゆく恐ろしさ、そのような形で死に追いやられてしまったら、地の深い穴、よみに落とされてしまったら、もう神の奇蹟を願ってもかなわない、「だから、私をそこへ追いやらないで！」という必死な叫びが聞こえてくるようなこの詩篇には、コラの子たちの経験が反映されているかのようです。最後の言葉「私の親友は暗やみです」（NIV、邦訳とは異なる）には、希望のない真つ暗闇にいる自分には、もう何も見えない、愛する者も、友も、親友もどこにいるのか分からない、というすべてが消え去った絶望感が表れていますが、そのような光の見えないどん底にあってもこの人がしがみついていた唯一のことは、神に向けた「信仰の祈り」だったのでした。

「しかしコラの子たちは死ななかつた」と民数記 26 : 11 に特記されているように、コラの子たちは生かされ、イスラエル王国時代には、主の例祭はじめいけにえの儀式に用いられる「穀物のささげ物」を焼くための「平なべ」作りに当たらせられたり、「主の宮」、神殿の門衛の役割を担わせられたりしたのでした。興味深いことに、神聖な幕屋の中で神殿奉仕に当たるために選ばれたケハテ族の中でも、そのような謙遜な仕事に甘んじていたコラの子たちの信仰告白とも思える神賛歌が、やはり冒頭に引用した詩篇 84 篇に反映されているのです。神の裁きの恐ろしさを知り、一瞬のうちに親族から引き離されるといふ悲しみ、苦難を通してコラの子たちが導かれ、確信に至ったことは、いつも主とともにいて、主を喜ぶことが幸い、恵み、力であるということでした。「私は悪の天幕に住むよりはむしろ神の宮の門口に立ちたいのです」には、裂けた地の中に引きずり込まれるように父祖コラと身内の者たちが天幕もろとも消えうせ、滅びたことを直接目撃し、あるいは伝え聞いたコラの子孫が、裁きの経験を通して知った揺るぎのない信仰、神への絶対的信頼が、表されています。神殿奉仕に比べれば神の宮の門衛という目立たない地味な仕事であっても、神の御傍におられるだけでもう感謝ですというへりくだった気持ちが伝わってくるようです。父祖コラとともに失われたはずの命が神の恩寵によって助けられ、代々生かされているだけでも感謝というのがコラの子たちの信仰告白だったのでした。

詩篇 87 編は、メシヤの時代を眺望した預言的洞察で、全地、全人類が真の神を認識し、部族、種族、国家を越えた主にある大家族のビジョンが描かれています。そこにも、「主は、シオンのもろもろの門を愛される」（87 : 2）と、神の都シオンが門に象徴されて描かれており、門衛ならではの詩的表現が窺えるのは興味深いことです。メシヤの時代には罪贖われた地の住民はみな、すべての源がいのちを与える唯一の方、メシヤ、真の神にあることを知るようになるのです。